

高等学校

平成24年度

教育研究員研究報告書

外国語

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	2
III	研究の仮説	4
IV	研究の方法	5
V	研究の内容	6
VI	研究の成果	21
VII	今後の課題	24

研究主題	高等学校外国語（英語）の指導における 思考力・判断力・表現力を高める評価の工夫と実践
-------------	---

I 研究主題設定の理由

平成 21 年の学習指導要領改訂では、21 世紀を切り拓く心豊かでたくましい日本人の育成を目指して、言語活動の充実や思考力・判断力・表現力の育成が一層重視されることとなった。これを受けて、平成 23 年度教育研究員高等学校外国語部会では、『思考力・判断力・表現力』を育成する効果的な言語活動の在り方を研究主題に、生徒の習熟度に応じて到達目標を設定し、その到達目標に向けて段階的な言語活動を行うことで、生徒の思考力・判断力・表現力を養っていく研究実践を行った。表現活動につながる背景知識や言語材料を身に付ける活動（インプット）から、身に付けた材料を用いて表現する活動（アウトプット）への一連の流れを意識して指導することで、生徒が主体的に段階的な学習に取り組むことができ、学習内容の定着が深まり、思考力・判断力・表現力を育成できたという成果が得られた。そして、研究を通して、段階を踏んだ指導の重要性や、指導における評価の工夫の必要性が認識された。

評価をめぐるのは、観点別評価の導入や、相対評価から絶対評価への移行など、様々な改善がなされてきている。そして、評価を指導の改善に生かすことや、適切かつ効果的な評価を行うことで生徒の学習意欲や学力の向上を図ることを目指した「指導と評価の一体化」を始めとして、各学校で授業や評価の改善に向けての取組がなされているが、中央教育審議会の報告では、高等学校の学習評価に関して、次のような課題を指摘している。

<p>「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」から （平成 22 年 3 月 24 日 中央教育審議会 教育課程部会）</p> <p>授業者・保護者を対象とした「学習指導と学習評価に関する意識調査」（平成 21 年）によると、高等学校においては以下の現状が明らかになってきた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「指導計画やシラバスに観点別の評価規準などを設けている」46% ・「指導要録や通信簿に観点別学習状況を記録している」7% ・「4 観点の評価は実践の蓄積があり、定着してきていると感じている」14% <p>現在、高等学校の学習評価については、観点別学習状況の評価の趣旨を踏まえた学習評価を行い、授業の改善につなげるよう努力している学校がある一方で、ペーパーテストを中心としていわゆる平常点を加味した、成績付けのための評価にとどまっている学校もあるとの指摘があり、小・中学校の状況とは異なっている点も見られる。</p>
--

高等学校における教科指導の場では、系統的な指導計画や適正な評価の定着がますます求められているにもかかわらず、まだまだ改善すべき点は多く、「指導と評価の一体化」をより一層図っていくことが、喫緊の課題であるといえる。

また、平成24年7月国立教育政策研究所発行の「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（高等学校 外国語）」において、外国語科の特性に応じた評価の観点及びその趣旨として次の4観点を示し、高等学校におけるきめの細かい学習指導と生徒一人一人の学習内容の確実な定着を求めている。

- 「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」
- 「外国語表現の能力」
- 「外国語理解の能力」
- 「言語や文化についての知識・理解」

しかし、高等学校では、特に「外国語表現の能力」、「外国語理解の能力」において、「思考力・判断力・表現力」の三つの力をバランスよく育成する際に、客観的な視点で具体的かつ段階的に評価する規準を明確に設定し、この三つの力を的確に把握した上で、指導に適切に反映していくことが求められるが、これらの改善が必要な学校においては、生徒が学習に対する達成感を十分に実感することができていないという課題がある。換言すれば、生徒の意欲を喚起し、「思考力・判断力・表現力」を育成することを目指し、様々な学習活動に取り組ませるための評価の実践が強く求められているといえる。生徒の学習に対する評価を行う際は、様々な側面から評価をする必要があり、例えば、学習活動に関わる生徒の意欲や努力など、定量的に評価しづらい側面をいかに評価するかは、授業者・評価者の工夫が求められるところである。これまでと同じようにペーパーテスト中心の評価を続けるだけでは適切な評価を行っていることにはならない。ペーパーテストに加え、「思考力・判断力・表現力」の観点から、生徒の学習活動を適切に評価することが必要である。

以上を議論していく中で、本部会は、「思考力・判断力・表現力」の伸長を定量的に評価し、これら三つの力を適切に効果的に育成する方法の研究が急務であるという結論に至った。

以上から、本年度の高等学校教育研究員外国語部会の研究主題は、「高等学校外国語（英語）の指導における思考力・判断力・表現力を高める評価の工夫と実践」とした。具体的には、外国語科において、授業内に行われるアクティビティやタスクといった「言語活動」を通じて三つの力を育成し、適切にそれらの力を評価する工夫を研究していくこととした。

Ⅱ 研究の視点

本研究では、次の三つの視点から考察を深めていくこととした。

1 外国語（英語）科における「思考力・判断力・表現力」の考察とその評価規準の作成

本部会では、まず外国語（英語）科における「思考力・判断力・表現力」について、前年度の研究成果を踏まえて、次のように考えた。

思考力：言語や文化における知識を活用し、場面や状況、背景、相手の表情などを踏まえて、英語で発信された情報や考えを的確に理解する力

判断力：英語で発信された情報や考えについて自己の知識や経験から状況を判断し、英語でその状況にふさわしい表現を選択する力

表現力：自分の伝えたいことを、場面や状況に応じて、適切な英語で相手に伝える力

その上で、それらを客観的に評価する規準を作成した。その際、「到達目標を具体的に明示したシンプルなリスト」として、“Can-Do-List”を作成する（19 ページ参照）ことを意識した。教材に応じて自由な使い方ができるように表現の幅をもたせたものとした。

先行研究として、評価規準「GTEC Can Do リスト」「福岡県立香住丘高等学校の Can Do リスト」「NHK の Can Do リスト」「CEFR-J」を考察し、できるだけ明確かつシンプルな規準を作成することとした。その結果、「思考力・判断力・表現力」の三つの項目に対して5段階の到達目標を設定し規準を定め、各校で活用しやすい評価規準の表を作成すること、教室内での言語活動を評価できるものを作ることを強く意識した。

2 評価規準におけるそれぞれの段階で考えられる具体的な「言語活動」についての考察

本研究における「言語活動」とは、「英語を読んだり聞いたりすることによってその伝えたい内容を理解したり、英語で書いたり話したりすることによって自分の伝えたいことを伝えようとする活動」と定義した。さらに、学習者の到達段階に適した「言語活動」を設定することが、意欲をもって学習に取り組むことへとつながっていくと考えた。

言語活動は、本研究における定義による「思考力」を伸ばすものと「表現力」を伸ばすものについては、具体的な評価につながるものとして設定し、「判断力」を伸ばす活動については、「達成している・していない」という視点ではなく、「関心・意欲・態度」という観点から評価されるものとして設定した。以下に、設定した具体的「言語活動」の例を挙げる。

(1) 「思考力」を伸ばし評価するための言語活動の例

・『T/F questions』

本文の内容に関する英文として正しいか (True)、間違っているか (False) を考えさせる活動である。この言語活動は、本研究の定義におけるレベル1の到達度の学習者が目標とするものとして設定したが、より上位のレベルの学習者に対しても、問題文のレベルを調整することで実施可能である。(これは他の言語活動においても同様である。)

(2) 「判断力」を伸ばすための言語活動の例

・『イメージング』

ある英語を読んだり聞いたりした後に、その内容を踏まえて自分が伝えたいと思うことを絵にして表現してみる活動である。本研究では、レベル1の「判断力」を身に付けるために有効なものとして提示した。

(3) 「表現力」を伸ばし評価するための言語活動の例

・『定型文を使った文章作成』

ある英語を読んだり聞いたりした後に、定型文を頼りに、その内容について、自分の意見を英語で言ったり書いたりする活動である。本研究では、レベル2に相当する言語活動として設定した。

※ 本研究でのレベル分類については、本報告書の“Can-Do-List”（19 ページ）を参照

3 評価規準を「思考力・判断力・表現力を高める授業の計画」へとつなげる方法の考察

続いて、本研究では、作成した評価規準をどのように「思考力・判断力・表現力を高める授業の計画」へとつなげていけば効果的な指導が行えるか、ということについて考察した。言うまでもなく、効果的な指導を実現するためには、指導と評価は一体化していなければならない。平成12年12月の教育課程審議会答申においては、「指導と評価の一体化」について、「学習指導の過程における評価を工夫する」、「評価を自分を見つめ直すきっかけとする」、「評価に対する学校の考えや方針を説明する」といった点がポイントとして挙げられている。それらの点を念頭に置いて、改めて実際の授業の組立てについて協議した内容は、以下のとおりである。

(1) 「思考力・判断力・表現力」の評価規準を基とした、生徒の現状の正確な把握

本研究において設定した各項目の五つのレベル設定（19、20 ページ参照）は、利用しやすいシンプルな規準となることを意図したため、必ずしもその学習集団が各レベルのどこかに正確に当てはまるとは限らない。生徒が主体的に自分の力を伸ばすことができる授業を設定していくためには、規準はあくまで目安とし、目の前の生徒の状況を授業者自身がしっかりと把握することが重要である。

(2) 担当クラスの中長期的到達目標の設定と、その生徒との共有

目標が設定されても、それが各授業で生徒に過度の負担を強いるようなものとなってしまえば、その達成は望めない。学年の終わりや卒業時などに到達したいレベルを適切に設定し、段階的な指導計画を立て、各授業の目標にそれを落とし込んでいく必要がある。そして、各授業の目標を生徒たち自身にもしっかりと意識させることが重要である。

(3) 学習の各段階での評価を目に見える形で生徒本人に示す

各授業での明確な目標が授業者と生徒の間に共有された上で、その各時間の授業の後や各単元の終了時などに、各生徒の達成の度合いを目に見える形で本人に示すことが必要である。その際、できていない部分はできていないとしっかり伝えるべきであるが、同時に目標を意識してその達成に向けて努力している生徒には、前向きな評価を積極的に与えていくべきである。自己評価をさせる機会をもつことも、生徒自身が自分の学習の状況を意識して把握することができるため、効果的である。また、設定した目標に到達していると判断できる生徒には、次の目標を提示していくことも重要である。達成感と同時に次の目標をもつことで、主体的な学習へとつながっていくと考える。

Ⅲ 研究の仮説

「思考力・判断力・表現力」の三つの力を育てていく上で、到達目標を設定することは非常に重要である。そこで、本研究では、「Ⅱ 研究の視点」で既に述べたとおり、到達目標を段階的に明示した客観的指標である“Can-Do-List”を作成した。この中で、英語の技能の「読むこと」と「聞くこと」を「受信型」、「書くこと」と「話すこと」を「発信型」と定義して、

それぞれの到達目標をレベル別に設定した。そして、この“Can-Do-List”を用いて段階的評価を行うことで、生徒の英語を活用する能力を向上させることができ、併せて、生徒の学習意欲が高まることで更に学力が向上する好循環となるという仮説を立てて、研究を行った。

IV 研究の方法

昨年度の研究テーマ「思考力・判断力・表現力の育成を図るための授業等についての実践研究」を踏まえて、本研究では、それら三つの力を育成する上での到達目標を、客観的指標により設定した。その指標を使用して評価することにより、育成したい力をより伸ばさせることが可能になると考えた。検証に当たり、下記の手順により研究を進めた。

1 「思考力・判断力・表現力」を観点とした“Can-Do-List”を作成し、到達目標の規準を明確にした上で、実際に授業を行う

(1) 到達目標の規準を明確にした“Can-Do-List”の作成

「思考力・判断力・表現力」を育成する上で、これら三つの力に関する到達目標の規準を定めることは、評価の工夫を考えるための大前提となるものである。使用する教科書レベルに対応させて、「できるようになる」ことを期待する内容を定義した。

(2) 「学習活動一覧表」との照合による授業計画の立案と授業実施及び検証

学習活動の到達目標にたどり着くためには、四技能（「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」）をバランス良く取り入れ、様々な言語活動を行う必要がある。そこで、到達目標別に言語活動の一覧表を作成して、学習状況に合わせた言語活動が選択できる仕組みを立案し、その内容を検証した。

(3) “Can-Do-List”との照合による Plan-Do-Check-Action サイクルの確立

学習活動の到達目標を“Can-Do-List”と照らし合わせながら、各時限の授業計画を立案し、その計画に基づいた授業を行った。その際、どのような言語活動を取り入れると到達目標にたどり着くか、スモール・ステップでの計画も立案し、授業計画及び授業実践に活用した。授業終了後には、目標から逆算した分析により成否を確認して修正を行い、次の授業を実施した。

2 研究開始段階及び研究期間中の生徒の英語学習の状況・成果を調査し、「思考力・判断力・表現力」の伸長を把握する

三つの力の育成のために、生徒の到達目標別に、評価の工夫と目指す英語力を伸長の関係について様々な方法を検討し、二つの調査を行った。一つは、“Can-Do-List”の生徒による自己評価であり、もう一つは、“Can-Do-List”使用前と使用後の生徒の学習意欲状況（授業が充実していたか、もっと学習したいか）の調査として行った、アクションリサーチである。結果は「VI 研究の成果」にまとめて提示する。

※ “Can-Do-List”及び「学習活動一覧表」については、19、20 ページを参照。

V 研究の内容

1 研究構想図

全体テーマ **新学習指導要領に対応した授業の在り方について**

高校部会テーマ **思考力・判断力・表現力を育成するための評価の工夫**

観点別評価における思考力・判断力・表現力とは

- 【**思考力**】 言語や文化における知識を活用し、場面や状況、背景、相手の表情などを踏まえて、英語で発信された情報や考えを的確に理解する力
- 【**判断力**】 英語で発信された情報や考えについて、自己の知識や経験から状況を判断し、英語でその状況にふさわしい表現を選択する力
- 【**表現力**】 自分の伝えたいことを、場面や状況に応じて、適切な英語で相手に伝える力

現状と課題

- 【**現状**】 「思考力・判断力・表現力」を客観的な視点で具体的かつ段階的に評価する必要がある。生徒のこれら三つの力を測ることが十分できておらず、達成感を実感することができていない生徒も多い。
- 【**課題**】 具体的かつ段階的な評価規準を作成し、その規準に基づいて到達目標・授業計画を定め、評価を行うことで英語学習に対する意欲を高め、生徒に「思考力・判断力・表現力」という三つの力の伸長を実感させる。

外国語（英語）部会主題

高等学校外国語（英語）の指導における 思考力・判断力・表現力を高める評価の工夫と実践

仮 説

英語の4技能である「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」の指導を行う際に、各技能を「思考力・判断力・表現力」の観点から作成した客観的な規準を用いて段階的評価を行うことで、生徒の英語を活用する能力を向上させることができる。併せて、生徒の学習意欲が高まることで、更に力が向上する好循環となる。

具体的方策

- (1) 「思考力・判断力・表現力」を規準とした“Can-Do-List”を作成し、到達目標の規準を明確にした上で、実際に授業を行う。
- (2) 研究開始段階及び研究期間中の生徒の英語学習の状況・成果を調査し、「思考力・判断力・表現力」の伸長を把握する。

検証・評価

“Can-Do-List”を規準とした学習活動を展開して、「思考力・判断力・表現力」を客観的に評価する。到達目標を具体的に明示した授業の結果を“Can-Do-List”と照らし合わせ、評価の工夫に基づいた授業と、生徒の英語を活用する能力及び学習意欲の向上との関連を検証する。生徒が学習意欲の向上を実感できる評価を行えば、「思考力・判断力・表現力」を更に高める指導につながることを検証し、これを本研究の評価とする。

2 研究内容

“Can-Do-List”とは、授業者が生徒の到達目標と考える英語技能について、レベル別に示した評価規準である。本研究では、生徒が高等学校の課程を通じて、どのような技能を身に付けることができるかを、「思考力・判断力・表現力」という観点から分類して明示することとした。従来から様々な“Can-Do-List”が存在するが、都立高校で活用できる規準の作成という視点で研究を行うこととした。そこで、様々な都立高校の現状と目標を踏まえ、教科書レベルという切り口でレベル1（初級）からレベル5（上級）までを設定し、全レベルの相関関係を見通した指導につなげられるものとした。（19 ページ参照）

3 実践事例Ⅰ 【レベル1の検証と成果】

科目名	英語Ⅰ	学年	1年
-----	-----	----	----

（1）“Can-Do-List”を導入するに当たって

まず、いかなる都立高校、いかなる学力の生徒が対象であっても、長期的に使用可能な「Can-Do-List」全体版を示す必要があると考えた。これは「思考力・判断力・表現力」に対する評価規準を策定するための基盤材料となる。そして、現状の高校生で、最も英語を苦手とする生徒の英語力がどの程度のものであるか、換言すれば、“Can-Do-List”におけるレベル1を目標とする生徒の英語力の実態、生徒像を把握する必要があると考えた。

そこで第一段階として、「英語が苦手な生徒に対する現状分析」の実施を行った。この分析に際し、“Can-Do-List”におけるレベル1のパイロット版の作成を念頭におき、授業を行うことにした。なお、この分析は、エンカレッジスクールで実施した。

（2）「思考力・判断力・表現力」を育てる評価の工夫と実践（現状分析）

本単元では、（5）評価規準に示す4観点に加え、以下のような「思考力・判断力・表現力」を観点とした評価を想定して、指導を行った。

●思考力（教室での観察と定期考査で評価）

- ・本文に対する英問英答や真偽問題（T/F questions）を通して、教室での観察や定期考査により思考力を評価する。

●判断力（教室での観察、ワークシートで評価）

- ・お互いのもつ情報の違い（インフォメーション・ギャップ）を活用したペアワークによる音読練習等を通して、教室での観察により判断力を評価する。
- ・写真描出問題、交通標識を示す英文の聴取練習等を通して、ワークシートにより判断力を評価する。

●表現力（ワークシート・個別テストで評価）

- ・交通標識の意味や、助動詞“must”を使用して簡単な英文を作成できるかどうかを確認するためのワークシートにより、表現力を評価する。
- ・昼休みに個別に実施する「感情を込めた音読テスト」により、表現力を評価する。

思考力は、口頭やワークシートによる英問英答など、教室でも評価できるが、量的また客観性の点から定期考査で評価することが望ましい。判断力を評価する言語活動は、どちらかというところシャドーイングに代表される言語活動の「練習」に相当するものが多い。インプットしたものをそのままアウトプットする作業・活動である。ゆえに、判断力は教室における観察による評価が望ましい。教室で個々の生徒に評価を与えると同時に、前向きな言葉かけを行えば、生徒の意欲を引き出すことができる。表現力を評価するための方法は様々ある。定期考査で評価することも可能である。しかし、より客観性と生徒の自主性を尊重するならば、ワークシートや発表が望ましい。

以上の三要素の評価方法については、「Ⅵ 研究の成果」にて示す。

(3) 単元名、使用教材

LESSON 4 「The Genbaku Dome」 (「All Aboard! English I」東京書籍)

(4) 単元(題材)の目標

- ①法助動詞“can” “will” “must”を運用できるようにする。
- ②リエゾンの基礎を意識して発音できるようにする。

(5) 評価規準

	ア コミュニケーションへの意欲・関心・態度	イ 外国語表現の能力	ウ 外国語理解の能力	エ 言語や文化についての知識・理解
単元の評価規準	①法助動詞の運用法を理解しようとしている。	①法助動詞が含まれた簡単な英文を書ける。	①法助動詞が含まれる英文を読める。 ②法助動詞が含まれた英文を聴き取れる。	①法助動詞の使い方を知っている。

(6) 単元指導計画

単元の指導計画と評価計画 (5時間扱い)

時間	学習活動	評価の観点				評価規準 (評価方法など)
		ア	イ	ウ	エ	
第一時	<ul style="list-style-type: none"> ・リスニング ・オーラルイントロダクション ・法助動詞の説明・練習 ・暗唱例文の暗唱 ・本文の概略をつかむ。 ・音読練習 	●				法助動詞の運用を理解しようとしている。 (ア① 観察)
第二時	<ul style="list-style-type: none"> ・リスニング ・暗唱例文の暗唱 ・本文の内容理解 ・T/F questions ・音声のポイント ・音読練習 					法助動詞が含まれる英文を読める。 (ウ① 観察)
第三時	<ul style="list-style-type: none"> ・語彙演習、ビンゴ ・暗唱例文の暗唱 ・本文の内容理解 ・T/F questions ・英作文演習 ・音読練習 		●	●	●	法助動詞が含まれた簡単な英文を書ける。 (イ① ワークシート)

第四時	・リスニング演習 ・暗唱例文の暗唱 ・本文の内容理解 ・T/F questions ・英作文演習 ・音読ペアワーク			●	法助動詞が含まれた英文を聴き取れる。 (ウ② 観察・ワークシート)
(本時) 第五時	・リスニング ・ビンゴ ・音読ペアワーク ・内容理解 ・自由英作文演習			●	法助動詞の使い方を知っている。 (エ① ワークシート) 法助動詞が含まれた簡単な英文を書ける。 (イ① ワークシート・観察)

(7) 本時（全5時間中の第5時間目）

①本時のねらい

- ・“must”、“must not”の意味と使い方を学び、簡単な英文を書けるようにする。
- ・発音や脱落音、リエゾンを意識して本文を音読できるようにする。
- ・本文の内容に関する英語の質問に英語で答えられるようにする。

②本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入	15分	1 挨拶 2 洋楽リスニング(ディクテーション) 3 新出語彙復習(発音練習・ビンゴ) 4 類義・反意語句復習(クライスクロス)	2 カタカナでも良いので聞こえたまま書き取る努力を促す。前時に学んだ can 、 here 、及び過去進行形の登場を指摘する。 3 声を出してリピートさせる。できるだけリストを見ずにチェックできるように促す。 4 任意の縦の列を指名し起立。発問して、挙手して答えた生徒は着席できる。	
展開	28分	5 黙読(Word Catcher) 6 音声のポイント説明(Today's Vocal Point) 7 音読トレーニング①(バズリーディング) 8 音読トレーニング②(ペアワーク・Gap-Gap Reading) 9 内容理解(Q&A) 10 ターゲットリスニング(写真描出問題)	5 語句を見付ける速さを競うが、目的は黙読させること。 6 ICT 機器を使用し must と again の強調を伝える。 7 声を出してポイントを押さえることを伝える。 8 Information gap を利用した音読練習。 9 内容に関する質問を ICT 機器で提示。ノートに答えを書かせ、指名。 10 写真描写問題を2題。音声面で must 、 mustn't に慣れさせる。写真リスニングの解答を参考にして、 must 、 mustn't を使用した英文を書かせる。数名指名し、黒板に書かせる。	イ① (ワークシート・観察)
まとめ	7分	11 ターゲットセンテンス復習 12 挨拶	11 must の意味合いを強調。	エ① (ワークシート)

・本時は教科書 30、31 ページを扱う。使用する曲は “*Shape of My Heart*”

(8) 本時の振り返り

今回の授業の眼目は50分の授業の中で、可能な限り多くの学習活動を取り入れたことである。学習活動を豊富に用意する授業スタイルは、普段から心掛けているスタイルである。

一つの活動、作業を最大7分以内に収め、全体で10の活動、作業を行った。その最大の理由は、この水準の学力の生徒の多くは、集中力に欠ける面が見られるからである。一つの作業の時間が長いと飽きてしまい、活動や作業を中断してしまう。ゆえに集中力が切れ始める5分から7分あたりで切り上げて、次の活動に移ることが必要なのである。今回は挨拶を含め全体で12のセグメントに分割した。短いものは2分で終わるものもある。ただし指導項目は、可能な限り一つに絞ることである。今回の授業の場合は、法助動詞、とりわけ“will”と“must”に焦点を絞った。その上で、“will”及び“must”に対する運用能力を高めるために、様々な視点から学習活動を用意した。

いずれにおいても、思考力、判断力、表現力の評価を行う前提として、この水準の生徒に対しては意欲を喚起する評価がより一層要求される。中学生の頃より英語を苦手としてきた生徒たちは、意欲の喚起の度合いによって、授業への取組姿勢が変わってくると考えられるからである。

(9) “Can-Do-List” 使用後の現状

9月以降、本校の目指す最低学力水準を基に、本校の生徒の実態に合わせて自作した“Can-Do-List”を念頭において授業を進めた。そして「暗唱」作業を軸に、できるだけ生徒に練習させ、実践させる時間を設けるようにした。この目的のために、和訳を前もって渡し、ICTの活用などを工夫して時間の捻出を図った。

その結果、アクションリサーチでは、確実に数字が変化した。とりわけ顕著だったのは、授業後の充実感である。「とても充実感がある、充実感がある」が13名から17名に増加している。さらに「とても学習したい、学習したい」が9名から13名と増加している。

※アクションリサーチの結果の概要は、23ページを参照のこと。

(10) 「思考力・判断力・表現力」を育てる評価の工夫と実践成果（“Can-Do-List”を使用して）

「授業者が目的意識をもって、生徒が動く授業」を実践することによって、生徒は変化した。特に、今回の成果として挙げられることは、

- ・授業内で「思考力・判断力・表現力」を多角的に評価する方法が、様々な存在すると証明された。
- ・活動は精選すべきである。何の力を付ける活動かをはっきりと生徒に示し、理解させた上で活動を行わせた方が、生徒は意欲的に取り組む。
- ・スモール・ステップを大切にす姿勢を忘れてはいけぬ。スモール・ステップを意識することで、各段階での活動の目標が明確になり、評価の方法も明確になることで、評価と指導がよりいっそう一体化する。

なお今回の検証では、本校の生徒に対する“Can-Do-List”を自作してそれに基づき授業を行った。現在、本校の英語科では、科全体としての“Can-Do-List”の作製にはまだ至っていない。しかし、本校では今年度、本校の英語に対する学力スタンダードとして次の(11)のものを定めた。今後、本校で独自の“Can-Do-List”を作製する場合、この学力スタンダードが規準となってくると思われる。参考までに、本校での学力スタンダードを転記する。

(11) “Can-Do-List” 全体版のレベル 1 の学力に相当する本校の目指す最低学力水準

- ・基本英文を暗唱・暗記し、運用できるようにする。
- ・基礎的な英単語を暗記し、運用できるようにする。
- ・実際に英語を使わなければならない場面において、とりあえず文法的なミスはしてもいいので、言いたいことを簡単な英語で伝えようとする態度を身に付ける。また、相手の言っていることを聞き取ろうとする態度を身に付ける。

ただし忘れてはいけないことは、目標を立ててそこに合わせる授業ばかりでは、授業が空転してしまう可能性があるということだ。無理な授業進行、目的に合わせたゴール達成では、生徒の知性が、授業者の想定を超えて飛躍的に開花するチャンスを奪ってしまう可能性がある。生徒の知性を飛躍的に開花させるためには、あえて生徒には目的を伏せるという指導も、時には必要であることを付記しておく。この点が今後の課題の一つである。

4 実践事例Ⅱ 【レベル 2 の検証と成果】

科目名	英語 I	学年	2 年
-----	------	----	-----

(1) “Can-Do-List” 使用前の状況

本校は、第 2 学年において、2 クラスを 3 展開して、少人数習熟度別授業を行っている。クラスには、基礎基本クラス、標準クラス、発展クラスがある。対象は、その中の基礎基本のクラスである。学習習慣が身に付いておらず、考査においては平均点に満たない生徒が半数である。また継続して学習する習慣ができていないため、まず授業に出席させ、毎時間の学習が学力に結び付くことをねらいとし、音読活動や様々な活動を織り交ぜて、生徒が退屈しない授業づくりを行っている。

(2) 「思考力・判断力・表現力」を育てる評価の工夫と実践 (“Can-Do-List” を使用して)

当初の生徒の状況を考慮して、“Can-Do-List” レベル 2 の検証と成果を実践した。「思考力」においては、授業におけるワークシートの取組や定期考査でのテストを中心に、「判断力」は授業の取り組み方や活動、そして「表現力」は感情音読のテストを実施し、評価の工夫を考えた。授業を行うことによって、「思考力」「判断力」「表現力」の三つの力を伸ばし、同時に生徒個人が自信をもち、自ら学ぶ力を付けることを期待して実践した。

(3) 単元名、使用教材

LESSON 10 「Life on Mars」 (「All Aboard! English I」 東京書籍)

(4) 単元 (題材) の目標

- ①火星を通じて、宇宙と生命の関係について読み取る。
- ②比較級・最上級を用いて英文を書くことができる。
- ③アクセントやイントネーションを意識して、内容を理解し、本文を音読する。

(5) 年間指導計画における位置付け

年間指導計画は、中学校英語の学び直しと基礎学力の定着を目的として策定している。授業は教科書と教科書準拠のワークブックを使用し、年間を通し、単語帳を用いた単語テストを毎時間実施している。語彙力を増やし、英語への苦手意識を払拭し、進んで学習する意欲と姿勢を身に付けさせることをねらいとしている。英語学習は音声の基本であることを踏まえて、音読シート等を用いた活動も実践している。

英語の基礎基本の力を身に付けさせるため、書かれていることを理解することに重点を置き、普段の積み重ねにより、生徒に、英文が読める、英語が分かるという成就感や達成感を味わわせることにつなげられる点に着目した。また様々な音読活動を通して、簡単な英語や英単語で自分の考えを伝えることへの興味や英語学習への関心をもつことができる意欲を高めるよう授業の計画や実践を行った。そのため、毎時間その時間に学ぶことや活動や評価を生徒に示し、生徒は学習内容や活動を理解した上で授業に参加している。次に挙げる“Can-Do-List”は、研究員共通の“Can-Do-List”から本校の授業のためにアレンジした表である。これを基に、本時では下線部の項目に重点を置いて授業展開した。

(6) “Can-Do-List” (本校授業版)

規準	思考力	判断力	表現力
方向	〈受信型〉	〈受信型・発信型〉	〈発信型〉
レベル 2	1. 英語 I の教科書を一文ごとに解釈できる。 2. 英語 I の教科書の内容を理解することができる。 3. 英語 I の重要文法項目や <u>単語・熟語を理解することができる。</u> 4. <u>内容の真偽を問う英問や、授業中の小テストに答えることができる。</u>	1. <u>単語・熟語をしっかりと覚えることができる。</u> 2. <u>Lesson ごとに大切な文法表現を整理して理解することができる。</u> 3. 提出物（ノート・小テスト）に積極的な姿勢を示すことができる。	1. <u>アクセントや発音に注意し、内容を考えながら感情を込めて音読することができる。</u> 2. 単語レベルやジェスチャー等を活用し、英語を使って最低限の意思疎通を図ることができる。 3. 英語に関心を持ち、授業者や生徒に質問できる。

(7) 単元指導計画

単元の指導計画と評価計画（8時間扱い）

時間	学習内容・学習活動	評価の観点				評価規準 (評価方法など)
		意	表	理	知	
第一時	・比較級の形と用法 比較変化を学び、比較級・最上級の作り方や用法を学ぶ。				●	観察・ワークブックへの取組
第二時	・比較級・最上級の不規則変化 比較の不規則変化を学び、比較級・最上級の作り方や用法を学ぶ。				●	観察・机間指導・ワークブックへの取組
第三時	・同等比較 同等比較の表現方法を学び、身近なものに関して表現する。 ・新出単語と表現 教科書 p.82 の新出単語と表現を確認する。		●	●		観察・机間指導・ワークブックへの取組
第四時	・新出単語と表現の復習 教科書 p.82 の新出単語と表現を復習する。 ・内容理解 教科書 p.82 の内容を確認する。 ・音読練習 教科書 p.82 の英文を音読練習する。			●		ワークシートへの取組・観察

第五時	<ul style="list-style-type: none"> ・新出単語と表現 教科書 p.83 の新出単語と表現を確認する。 ・内容理解 教科書 p.83 の内容を確認する。 ・音読練習 教科書 p.83 の英文を音読練習する。 	●		●		ワークシートへの取組・観察
第六時	<ul style="list-style-type: none"> ・新出単語と表現 教科書 p.84 の新出単語と表現を確認する。 ・内容理解 教科書 p.84 の内容を確認する。 ・音読練習 教科書 p.84 の英文を音読練習する。 			●	●	ワークシートへの取組・観察
第七時 (本時)	<ul style="list-style-type: none"> ・Lesson 10 のまとめ 多様な音読活動を通して音読し、本 Lesson の内容を再確認し、英語による内容真偽の問題に取り組む。 	●		●		ワークシートへの取組・観察
第八時	<ul style="list-style-type: none"> ・Lesson 10 の感情音読 生徒に自分の読みたいページを選ばせ、感情を込めて音読する練習を行い、プレゼンテーションを行う。 	●	●			感情音読のプレゼンテーション

(8) 本時 (全 8 時間中の第 7 時間目)

①本時のねらい

- ・筆者の伝えたいメッセージを音読等の活動を通して理解する。
- ・音読練習を通して、英語のリズムやイントネーションで音読し、内容の深化を図る。

②本時の展開 (※下記下線部は“Can-Do-List”での注意点)

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入	5分	1 本時の学習事項の確認 ・ 授業者の話を聞きながら黒板を見る。	・ 本時の授業で、できるようになることを提示する。	
展開 A	15分	2 音読練習 ・ 教員の後に続き、音読する。 (ページごとに行う。) (1) 一斉音読 (2) 四方読み	・ 声に出して、感情を込めて音読するよう心掛けるように指導する。 ・ 机間指導を行い、個への指導を行う。	
展開 B	20分	3 パーシャルディクテーション ・ <u>パーシャルディクテーションシートに英語を聞きながら単語を書き取っていく。</u> 終了後は、各自で教科書を見て答え合わせを行う。	・ 授業者の音読で行うが、最初は普通の速さで、2回目はゆっくり音読するよう心掛ける。 ・ 自己採点で聞き取れなかった箇所を確認させる。	<u>判断力</u> (ワークシート)
まとめ	10分	4 T/F Questions ・ <u>T/F Questions シートの設問に答える。</u> 答え合わせを行い、できた箇所とできなかった箇所を確認する。	・ まとめであるため、簡単に答え合わせを行う。 ・ 終了後ワークシートに付いている“Can-Do-List”で、できるようになったことを確認させる。	<u>思考力</u> (ワークシート)

- ・本時は教科書とプリントを使用する。

(9) 本時のポイント (“Can-Do-List” の何を中心に実践しているか)

T/F questions や、パーシャルディクテーション (部分空欄のディクテーション) テストを行う【思考力】。音読活動を多く取り入れ、書かれていることが何であるか理解【判断力】し、次時に感情音読の実技テストを行うこととした【表現力】。

(10) 本時に使用したワークシート（一部）

Dictation Sheet

英語を聞いて、()に入る単語を書き取ろう！！

In the night sky, Mars () often () () other planets. It has many mysteries. One of them is about () () ().

In 1877, an Italian astronomer () some () () on Mars. The lines looked like (). People thought they () () () a life form. In 1898, H.G. Wells, a British novelist, () The War of the Worlds. In this book, he () this famous () of a Martian.

どのくらい書き取れましたか？

よくできた ・ できた ・ ふつう ・ あまりできなかった ・ できなかった

T & F Sheet

本文の内容と一致しているものには T を 一致していないものには F を () に書きましょう。

- ① Mars is usually not a bright planet. ()
- ② Life forms made canals on Mars. ()
- ③ Scientists discovered Martians on Mars. ()
- ④ American people listened to a radio drama based on *The War of the Worlds*. ()
- ⑤ There was a panic in many places across America. ()
- ⑥ There may be life on Mars. ()

Can DO Check

Lesson 10		○か×を付ける
① 比較級・最上級が分かり、意味が取ることができる。	思考・判断	
② 本文に書かれていることがどんなことか分かる。	思考・判断	
③ 火星に関する話を読んで、宇宙と生命の神秘について理解することができる。	思考・判断	
④ 声を出して、気持ちを込めて音読することができる。	表現	

(11) 本時の振り返り

習熟度別クラス編成における基礎基本クラスの生徒に、1時間で何を学び何ができるようになればよいのかを授業者が提示した上で活動に取り組みさせた。また、成就感や達成感を与えるための指導の工夫と評価・実践に着目し、授業を展開した。

授業後に行ったアクションリサーチ等の結果から、生徒は自分の状況を把握することができ、授業前後の成長を実感することができたことが分かった。また、授業者は教材研究や評価計画を綿密に立てることで、評価するポイントを明確に把握することができ、生徒の「英語嫌い」を減らす指導が可能になった。“Can-Do-List”のレベルに応じて指導の方向性を定めることができれば、生徒も授業者も一定の成果を上げることができ分かった。

※アクションリサーチの結果の概要は、23 ページを参照のこと。

(12) “Can-Do-List” 使用後の現状

授業者側が生徒に指導の重点項目や評価規準を明確に示すことにより、生徒は授業で学ぶポイントや学習方法が理解できるようになった。その結果、生徒は、配布したプリントに対して真剣に取り組むようになり、活動も積極的に行うようになった。また、言われなくても予習ができるようになった。さらに、多くの音読活動やタスクを取り入れたことで、生徒の英語学習に関する苦手意識も払拭できた。

(13) 「思考力・判断力・表現力」を育てる評価の工夫と実践成果（“Can-Do-List”を使用して）

“Can-Do-List” レベル2の検証と成果を実践した結果、「思考力」においてはワークシートや T/F questions のチェック、「判断力」は授業における活動、そして「表現力」は感情音読と分けて評価を行うことができた。いずれにおいても、クラス分けを行った最初の授業とは少しではあるが変化し、生徒の「思考力・判断力・表現力」の三つの力も伸び始め、また、アクションリサーチの結果から、関心・意欲を上げることにもつながってきていることが分かった。“Can-Do-List”は、生徒だけでなく授業者においても、授業計画・評価基準の作成、指導方針の徹底、生徒理解などに有効であると検証することができた。

5 実践事例Ⅲ 【レベル3の検証と成果】

科目名	英語Ⅱ	学年	2年
-----	-----	----	----

(1) “Can-Do-List” 使用前の状況

生徒一人一人の授業に対する姿勢は真面目だが、基本的な英語力はまだ身に付いていない。音読と速読を通して、文法面にあまりとらわれず、文章の内容を上手に理解できるよう、何度も読むことを心掛けて指導している。また、文法面や語彙力の向上には、別の時間に詳しく説明し、演習を適宜用意して定着させている。読解面に特に力を入れることで、各チャプターの確認テストにじっくり取り組ませ、内容を十分に理解させるよう配慮し、授業以外にも個に応じてノート提出とその指導を行い、やる気と自信を育成するようにしている。

(2) 「思考力・判断力・表現力」を育てる評価の工夫と実践（“Can-Do-List”を使用して）

当初の生徒の状況を考慮して、“Can-Do-List” レベル3の検証と成果を実践した。「思考力」においては「小テスト」を中心に、「判断力」は授業への取組の様子、そして「表現力」は発表能力と大別し、評価の工夫を考えた。その結果、生徒の関心・意欲につながり、生徒個人が自信を身に付け自ら学ぶ力が育つことを期待して実践した。

(3) 単元名、使用教材

LESSON 7 「What do you need to change to world?」

(「Powwow English Course II」文英堂)

(4) 単元（題材）の目標

- ①音読・速読・精読をし、作者のメッセージを読み取る。
- ②過去完了進行形・仮定法過去完了などの表現を復習する。

(5) 年間指導計画における位置付け

年間指導のテーマとして挙げる「内容理解」のため、本時では「読むこと」、「書くこと」に重点を置き、英文が読めるようになるという点に着目した。また、音読・速読を通して実践的表現方法を習得し、英語でコミュニケーションを図ろうとする意欲を高めることにも挑戦した。そのため、授業者の授業の目的と評価を生徒に提示し、生徒に授業での学習の仕方をより明確にさせた上で授業を行っている。次に挙げる“Can-Do-List”は、研究員共通の“Can-Do-List”から本校の授業のためにアレンジしたものである。これを基に、本時ではそれぞれ1及び2の項目に重点を置いて授業を実践した。

(6) “Can-Do-List”（本校授業版）

規準 方向	思考力 〈受信型〉	判断力 〈受信型・発信型〉	表現力 〈発信型〉
レベル3	<ol style="list-style-type: none"> 1. 英語Ⅱの教科書を一文ごとに解釈できる。 2. 英語Ⅱの教科書を段落ごとに要約できる。 3. 英語Ⅱの教科書を Lesson ごとに理解できる。 4. 英問や巻末の小問題、授業中の小テストに答えることができる。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 単語・熟語をしっかり覚えることができる。 2. Lesson ごとに大切な文法表現を整理して理解できる。 3. 巻末の問題や SUMMARY などに対して復習できる。 4. 提出物（ノート）・小テストに積極的に取り組むことができる。 5. 授業中のノートのまとめ方、授業の聞き方、他者の意見に耳を傾けることができる。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 速読文の空欄補充を音読、リスニングしながら補充できる。 2. アクセントや発音に注意して感情を込めて音読できる。 3. 英問英答できる。 4. Lesson で学ぶ重要語句や文法を使って英作文ができる。 5. 英語に関心をもち、授業者や生徒に質問したり助言したりできる。

(7) 単元指導計画

単元の指導計画と評価計画（8時間扱い）

時間	学習内容・学習活動	評価の観点				評価規準 (評価方法など)
		関	表	理	知	
第一時	<ul style="list-style-type: none"> ・音読と速読をし、主人公と作者の心情を読み取る。 ・過去完了進行形を理解する。 	●		●		<ul style="list-style-type: none"> ・大きな声で積極的に読んでいる。 ・had been を理解し、上手に表現できる。
(本時) 第二時	<ul style="list-style-type: none"> ・アクセントなどを意識し音読・精読する。 ・左から右への速読を改めて実践する。 ・速読から読解し、リスニングからディクテーション 		●			<ul style="list-style-type: none"> ・文章の内容を説明できる。 ・速読と音読を繰り返すことで、読解力を上げ、仕上げにリスニングする。
第三時	<ul style="list-style-type: none"> ・音読と速読をし、作者の主人公に対する意図を読み取る。 ・重要表現をチェックする。(小テスト) 	●			●	<ul style="list-style-type: none"> ・大きな声で積極的に読んでいる。 ・登場人物や重要表現に関心をもち、理解しようとしている。
第四時	<ul style="list-style-type: none"> ・アクセントなどを意識し音読・精読する。 ・内容に関する質問に英語で答える。 ・速読から読解し、リスニングからディクテーション 		●	●		<ul style="list-style-type: none"> ・文章の内容を説明できる。 ・間接疑問文を理解して、上手に表現できる。
第五時	<ul style="list-style-type: none"> ・音読と速読をし、主人公と作者の心情を読み取る。 ・重要表現をチェックする。(小テスト) 				●	<ul style="list-style-type: none"> ・大きな声で積極的に読んでいる。 ・登場人物や重要表現に関心をもち理解しようとしている。

第六時	・アクセントなどを意識し音読・精読する。 ・内容に関する質問に英語で答える。 ・If S had～の仮定法過去完了を理解する。		●	●	・文章の内容を説明できる。 ・仮定法過去と過去完了の違いを理解し、上手に表現できる。
第七時	・音読と速読をし、作者の主人公に対する意図を読み取る。 ・重要表現をチェックする。(小テスト)				● ・大きな声で積極的に読んでいる。 ・登場人物や重要表現に関心をもち、理解しようとしている。
第八時	・アクセントなどを意識し音読・精読する。 内容に関する質問に英語で答える。 ・Practice で演習させ本課のまとめをする。	●	●		・文章の内容を説明できる。 ・今までの文法を理解し表現できる。 ・本課のねらいを理解できる。

(8) 本時 (全8時間中の第2時間目)

①本時のねらい

- ・音読・速読を繰り返し、文章の内容を理解する。
- ・著者の様子と心情を読み取り、英語で説明できるようにする。
- ・重要表現・単語に対して関心をもち、文法にとらわれず内容を早く正しく理解する。
- ・リスニング力を向上させる。

②本時の展開 (※下記下線部は“Can-Do-List”での注意点)

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
準備	5分	・ 前回の内容復習をする。 (日本語で内容発表)	・ 前回の内容確認(導入)をし、新出単語を確認する。	・ 思考力と表現力 (観察)
導入	5分	・ 本時の目標を把握する。	・ 本時の内容を説明しワークシートを使い読解(速読)を指示する。	・ 判断力 (観察)
展開	30分	・ 速読をする。(黙読) ・ <u>速読をする。</u> ※「速読プリント」を使って訳読をする。 ・ 内容確認をする。 ・ <u>音読をする。</u> ※「空所補充プリント」の空欄を埋め、語句を覚える。 ・ リスニングで読解を十分に理解する。	・ 各自、読解(速読)させる。 ・ 一文を文節の区切りで読むよう指示する。 ・ <u>左から右へ、文節の区切りで訳読を行う。</u> ・ <u>パラグラフごとに文意をまとめさせる。</u> ・ 指名、質問を繰り返しながら、積極的に表現する姿勢と内容理解の定着を図る。重要表現等を、板書しながら併せてチェックする。 ・ <u>文意を理解した上で、改めて音読を行う。</u> ・ 「 <u>空所補充プリント</u> 」を使って重要語句の理解整理を行う。 ・ 机間指導により、正しくできているかを確認する。	・ 判断力 (観察) ・ <u>思考力と判断力</u> (発表) ・ <u>思考力</u> (発表) ・ 判断力と表現力 (テスト) ・ <u>表現力</u> (発表・観察) ・ <u>思考力と判断力</u> (テスト) ・ 判断力 (観察)
まとめ	5分	・ 本時のまとめと次回の予告。	・ 改めて本文をまとめる。	・ 表現力 (観察)

(9) 本時のポイント

T/F questions、パラグラフごとの要約で、テンポよく小テストを行う【思考力】。速読と精読を繰り返し、空欄補充問題やトピックセンテンスの確認などをする【判断力】。最後に生徒個々の意見を英語や日本語で発表させる【表現力】。上記の能力を向上させる学習活動

として次の(10)に挙げる資料を生徒に配布した。

(10) 本時に使用した補助教材(一部)

【ポイント】

1. 一文を文節の区切りで解釈する。
Of course,/ Bono was not alone/ in achieving/these results./
()()()()
(速読プリント)
2. 速読・精読から音読へ
(空欄補充プリント)
Of course,/ Bono was not
()()()/these results./
3. この課の文法レッスン
※in ~ing (=when~) 「~の時」

(11) 本時の振り返り

今まで漠然と生徒の現状に合わせて授業を展開してきたが、改めて指導の工夫と評価・実践に着目し授業を展開した結果、生徒の成長はもちろん、指導の展開の仕方がしっかりと整理できた。明確な目標・評価規準が示されない漠然とした授業では、生徒はフラストレーションがたまり、生徒の意欲・関心へつながらないなど、結果として「英語嫌い」を助長していたと感じた。今回の授業の成果は、授業者が評価するポイントを明確にできたことと、生徒の成長を確かめながら高いレベルを求めて指導ができるようになったことである。一方、生徒は学び方と評価方法を理解し、英語力の向上を感じられるようになった。授業後に行ったアクションリサーチ等の結果から、“Can-Do-List”のレベルに応じて指導の方向性を定めていくことにより、生徒も授業者も一定の成果につながれることが確認できた。

(12) “Can-Do-List” 使用後の現状

生徒は、従前に比べて、配布した教材に対して真剣に取り組むようになった。授業者の指導方法が明確になった分、生徒も授業のポイントや学習方法が理解できるようになった。その結果、言われなくても予習ができるようになり、復習を十分に行い、定期考査に対しても余裕をもって取り組むようになった。「できる」という自信が生じた成果、受験勉強の姿勢、個別に質問に来る機会も増え、生徒の意欲・関心に大きな変化が生じていると実感している。

(13) 「思考力・判断力・表現力」を育てる評価の工夫と実践成果(“Can-Do-List”を使用して)

“Can-Do-List” レベル3の検証と成果を実践した結果、「思考力」においては「小テスト」を中心に、「判断力」は授業の取り組み姿勢、そして「表現力」は発表能力と大別し、評価の工夫ができた。いずれにおいても、当初のアクションリサーチが大きく変化し、その結果、生徒の意欲・関心にもつながって、生徒個人の自信と自ら学ぶ力になっていることが分かった。“Can-Do-List”は、生徒だけでなく授業者にも、評価の目安、指導方針などに大きく役立つと検証できた。

“Can-Do-List”

	思考力	判断力	表現力
	＜受信型＞	＜受信型・発信型＞	＜発信型＞
5			
科目レベル コミュニケーション英語Ⅲ 英語表現Ⅱ	<ul style="list-style-type: none"> ・結末を予測しながら論理的に速読できる。 ・英語を一回聴いただけで細部まで内容把握できる。 	<p style="text-align: center;">＜受信型＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・背景知識を活用して、話し手・聞き手の伝えたいことを素早く適切に判断できる。 <p style="text-align: center;">＜発信型＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・論理構成を意識して状況に合った表現を素早く選択できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・即興で説得力のある自分の意見を論理的に表現することができる。
4			
科目レベル コミュニケーション英語Ⅲ 英語表現Ⅱ	<ul style="list-style-type: none"> ・パラグラフごとに論理展開を意識して概要をまとめることができる。 ・英語を一回聴いただけで概要・状況をつかむことができる。 	<p style="text-align: center;">＜受信型＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・背景知識を活用して、話し手・聞き手の伝えたいことを適切に判断できる。 <p style="text-align: center;">＜発信型＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・論理構成を意識して状況に合った表現を選択できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の意見を論理的に表現することができる。
3			
科目レベル コミュニケーション英語Ⅱ 英語表現Ⅱ	<ul style="list-style-type: none"> ・パラグラフごとに要点を整理して、概要をまとめることができる。 ・英語を数回聴けば概要・状況をつかむことができる。 	<p style="text-align: center;">＜受信型＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話し手・書き手の伝えたいことを適切に判断できる。 <p style="text-align: center;">＜発信型＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・状況に合った表現を選択できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な表現を使いながら、適切な英語を書いたり話したりできる。
2			
科目レベル コミュニケーション英語Ⅱ (中級程度) 英語表現Ⅰ	<ul style="list-style-type: none"> ・5W1Hを意識して読んだり聞いたりした英語の概要をつかむことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・主題・状況・概要を判断、確定できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・与えられた定型文を用いて自分の意見・考えを伝えられる。
1			
科目レベル コミュニケーション英語Ⅰ コミュニケーション 英語基礎	<ul style="list-style-type: none"> ・読んだり聞いたりした英語の概要をつかむことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・主題・状況・概要を判断、確定できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・単語レベルもしくはジェスチャーで最低限の意思伝達ができる。

学習活動一覧表

	思考力	判断力	表現力
	＜受信型＞	＜受信型・発信型＞	＜発信型＞
5	＜内容把握＞ ・ T/F questions (精読前の複雑な英文) ・ 5W1H の Questions (一度読んで・聞いて答える) ＜主題理解＞ ・ 本文要約 (時間制限・文字制限) ・ 筆者の伝えたいことを考える ・ 自分の意見をもつ ＜文構造＞ ・ パラグラフの論理関係の分類	＜自分の意見に向けての判断＞ ・ 意見の交換、コメントの交換 ・ 賛成・反対を明示する練習 ・ 説得力のある表現の習得 ・ 理由を述べる習慣をもつ ・ 複雑な文章の中で良し悪し等を表にする ＜語句・文法・内容理解の判断＞ ・ シャドウイング (意味の理解を伴いながら) ・ 論理展開に従ったパラグラフの整序	＜本文を使った表現活動＞ ・ 本文のリテリング(即興) ・ 筆者の意図や要約を発表する(即興) ＜自分の意見を述べる活動＞ ・ 本文に関するディスカッション、ディベート ・ 与えられたテーマに関してスピーチ、ディスカッション、ディベート ・ リスニング内容に関する自由英作文 ・ 良し悪し等の判断がつきにくい題材について、自分の意見を論理的に述べる
4	＜内容把握＞ ・ T/F questions (精読前の本文と異なる英文) ・ 5W1H の Questions (精読後の本文と異なる英文) ＜主題理解＞ ・ パラグラフごとの要約 ・ 筆者の伝えたいことを考える ・ 自分の意見をもつ ＜文構造＞ ・ 物語の展開図を考える (図) ・ パラグラフの論理関係の分類 (導入、例示、起承転結等)	＜自分の意見に向けての判断＞ ・ 意見の交換、コメントの交換 ・ 賛成・反対を明示する練習 ・ パラグラフライティングの指導 ＜語句・文法・内容理解の判断＞ ・ パラグラフ要約文整序 ・ 事実と意見を分類する練習 ・ 一度読んだ文章の同時通訳演習 ・ まとまった英語を聞き大事な部分のメモをとる	＜本文を使った表現活動＞ ・ 本文のリテリング(自分で文章作成) ＜自分の意見を述べる活動＞ ・ 本文についてパラグラフライティング ・ 与えられたテーマに関してスピーチ原稿作成 ・ 4コママンガでの状況説明 ・ ピンボンディベート ・ 英文日記
3	＜内容把握＞ ・ T/F questions (精読後の本文と異なる英文) ・ 5W1H の Questions (精読後の平易な英文) ＜主題理解＞ ・ パラグラフごとの要約 ・ 筆者の伝えたいことを考える ・ 自分に置き換えて考える ＜文構造＞ ・ パラグラフの論理関係の分類 (導入、例示、起承転結等)	＜自分の意見に向けての判断＞ ・ 意見・コメント交換、書き直し ・ 既習の定型文の復習 ・ まとまった英文内接続詞穴埋め ・ 意見を述べる時の TPO の練習 ・ パラグラフライティングの指導 ＜語句・文法・内容理解の判断＞ ・ パラグラフの整序 ・ 単語テスト(文脈) ・ 複雑な文構造の分解 ・ 体系的な文法演習 ・ フルーツバスケット ・ トピックセンテンスの指摘	＜本文を使った表現活動＞ ・ 要約の発表 ＜自分の意見を述べる活動＞ ・ 主題に対する感想の発表 ・ 本文の内容に関する数文の自由英作文 ・ 与えられたテーマに関しての説明 ・ 英文日記 ・ 4コママンガのセリフを埋める
2	＜内容把握＞ ・ T/F questions(平易な英文) ・ 5W1H Questions(平易な英文) ＜主題理解＞ ・ 要約の穴埋め ・ 作者の意図を理解する ＜文構造＞ ・ 内容のマッピング	＜自分の意見に向けての判断＞ ・ 意見交換、書き直し ・ 意見を述べるときに使う単語・構造の練習 ＜語句・文法・内容理解の判断＞ ・ 単語テスト(平易なもの) ・ フレーズに区切る ・ 定型文を使った英作文 ・ ディクテーション ・ シャドウイング(音声面)	＜本文を使った表現活動＞ ・ 感情音読 ・ 暗唱 ・ 穴埋め要約の発表(暗唱) ・ 定型文を使った文章作成 ＜自分の意見を述べる活動＞ ・ 主題に対する感想の発表 ・ 定型文を使った文章作成
1	＜内容把握＞ ・ T/F questions (平易な英文) ・ タイトルの選択 ・ 意味を理解して音読 ＜主題理解＞ ・ 内容一致選択問題(平易な英文) ＜文構造＞ ・ 左から右へ文節の区切りで読む	＜自分の意見に向けての判断＞ ・ 意見交換 (妥当性を見る) ・ 感想に使う英単語の選択 ＜語句・文法・内容理解の判断＞ ・ 単語テスト (平易なもの) ・ フレーズに区切る ・ フレーズに切って音読 ・ パーシャルディクテーション	＜本文を使った表現活動＞ ・ 感情音読 ＜自分の意見を述べる活動＞ ・ 主題に対する感想の発表

※各学習活動は、記載された規準レベル以上にて実施可能な活動であるものとして考える。

VI 研究の成果

第一の成果は、「思考力・判断力・表現力」についての共通の“Can-Do-List”を踏まえ、各授業者が担当するクラスの現状に合わせて落とし込むことにより、三つの力の客観的評価規準ができたことである。これにより、ペーパーテストでは測ることが難しかった力も具体的かつ段階的に評価できるようになった。そして、冒頭にも述べた「指導と評価の一体化」に一步近付いたといえる。

また、共通の“Can-Do-List”から想定できる学習活動を載せた「学習活動一覧表」を作成し、これらの活動をバランス良く授業に取り入れたことによって、三つの力を適切に指導・評価することができるようになった。この一覧表からも分かるように、「思考力・判断力・表現力」の評価については様々な方法があり、授業者は様々な学習活動の中から、必要な学習活動を選択することができる。

<具体的に評価することで改善された点>

- ・生徒の英語に対する苦手意識がなくなり、英語に対して前向きになった。
- ・生徒の授業内容への理解が深まったため、授業内容への質問に来るようになった。
- ・生徒の英語運用能力が高まったため、授業内での発言が多くなった。
- ・生徒が小テスト等に対して積極的になり、結果を求めるようになった。
- ・授業者が教室で評価ができることにより、判断力が評価できるようになった。
- ・生徒は、スモール・ステップでの学習により、目標を意識して学習できるようになった。

<段階的に評価することで改善された点>

- ・小、中学校とのつながりを意識しながら、授業者が指導を行えるようになった。
- ・生徒の発達段階に応じた指導を行えるようになった。
- ・授業者同士で綿密に情報交換を行い、授業が修正・補正できるようになった。
- ・生徒の苦手な項目を明確にして、少しずつ克服させられるようになった。
- ・「語彙」「フレーズ」「センテンス」「パラグラフ」の各レベルで評価できるようになった。

<思考力・判断力・表現力と評価方法の関係>

	定期考査	教室での観察	ワークシート	発表
思考力	◎	○	○	△
判断力	×	◎	×	○
表現力	○	△	◎	◎

◎ = より適切 ○ = 適切 △ = やや適切ではない × = 適切ではない

第二の成果は、「思考力・判断力・表現力」についての評価規準をはっきりさせたことが、授業者と生徒の両方により影響を及ぼしたことである。授業者側は年間の見通しを明確にすることができる。そして、教科書のエクササイズや言語活動の一つ一つを、“Can-Do-List”の「この力を付けさせたい」という目標に向かって、指導の中で体系的に組み立てることが容易になった。ゴールを見据えてプロセスを考える発想が授業者側に定着し、今まで漠然と行っていた言語活動がより高い効果を発揮するようになった。例えば音読一つをとって

も、思考力を問う活動なのか、表現力を問う活動なのかによって、生徒への指示の出し方が変わってくるからである。

本研究では、レッスンごとの“Can-Do-List”を作成し、活動のねらいなどを明確に示して、生徒に授業開始前の現状を把握させた上で、授業後に達成状況を自己評価させた。下記がその際に使用したものである。(同じものをレッスン開始前と終了後に使用)

Lesson 7 Wilderness in a Bottle				
Class	No.	Name		
Can-do 項目			チェック欄	
1.	新出単語を使って作文できる。	表現	A	B C
2.	本文を音読することができる。	判断	A	B C
3.	本文の内容を理解できる。	思考	A	B C
4.	文法を使うことができる。	表現	A	B C
	①助動詞 would		A	B C
	②助動詞+完了形		A	B C
	③If+主語+should/were to+動詞の原形		A	B C
	④仮定法現在		A	B C
5.	Question (worksheet B)に答えられる。	思考・判断	A	B C
6.	Exercises に答えられる	表現	A	B C
7.	サマリーを作ることができる。	思考・判断	A	B C
A…できる			B…なんとかできる	
C…努力が必要				

以下は、上記“Can-Do-List”の自己評価の結果をまとめたものである。この結果の数値の変化から、評価すべき生徒の「思考・判断・表現」の変化の様子を見て取ることができる。

<Lesson 7 Wilderness in a Bottle 授業の際に実施した“Can-Do-List”の調査結果>

		A	B	C
レッスン開始時 → レッスン終了時	1	2 → 4	24 → 29	11 → 6
	2	25 → 32	12 → 6	0 → 1
	3	16 → 15	18 → 23	3 → 1
	4①	15 → 14	17 → 23	5 → 2
	4②	9 → 18	22 → 20	6 → 1
	4③	6 → 14	22 → 21	9 → 4
	4④	5 → 7	21 → 28	11 → 4
	5	5 → 8	25 → 26	7 → 5
	6	5 → 8	24 → 28	8 → 3
7	2 → 4	20 → 22	15 → 13	

この結果から、レッスン開始時とレッスン終了時を比較したとき、例えば「A：できる」と回答した生徒の数字が増えていることと、「C：努力が必要」と回答した生徒の数字が減っていることが理想である。また、「B：なんとかできる」に関しては、レッスンを通じて「A：できる」に回答を変える生徒が増えていると同時に、「C：努力が必要」に回答を変える生徒を生まないような努力が必要である。つまり、できるようにする一方、できない意識をもってしまう生徒を育てないことが重要である。

生徒の表現力についての成果は、例えば「1. 新出単語を使って作文できる。」の学習活動により確認できる。学習開始時に「A：できる」と回答した生徒が2名だったのに対し、終了時には4名と倍増している。そして「C：努力が必要」と回答した生徒が学習開始時には11名存在していたが、終了時には6名と、およそ半減している。この数値から、生徒の表現力を向上させることにつながっていることが確認できる。

次に、生徒の判断力についての成果は、例えば「2. 本文を音読することができる。」の学習活動により確認できる。学習開始時に「A：できる」と回答した生徒が25名だったのに対し、終了時には32名と、クラスの大半が学習成果を実感する結果となっており、1名を除くクラス全員が「B：なんとかできる」以上の実感を得たことになる。この数値から生徒の判断力を向上させることにつながっていることが確認できる。もちろん、「判断力」についてはこの数値だけで全てを検証してわけではないと考えるが、その点については、「Ⅶ今後の課題」にて述べる。

最後に、生徒の思考力については、「Can-do 項目」の「3、5、7」の数値をそれぞれ確認することで、成果を確認することができる。

全ての項目を同じ学習活動で実施したわけではないので、必ずしも均一に成果が出たわけではないが、授業の目的を理解した上での学習活動は確実に生徒が意欲的に取り組み、成果を挙げることができるといえる。

さらに、生徒の関心・意欲の変容を見るために実施してきたアクションリサーチからも、生徒の変容が見てとれる。以下はアクションリサーチの結果の抜粋である。

アンケート項目	実践校1 (19名中)		実践校2 (19名中)		実践校3 (30名中)		実践校4 (14名中)	
	List 使用前	使用后	List 使用前	使用后	List 使用前	使用后	List 使用前	使用后
授業がとても充実	13	17	1	7	4	14	4	6
英語をもっと学習したい	9	13	0	1	13	26	9	9
授業がとても楽しい			3	6	3	20	3	5

「充実感」や「もっと勉強したい」という項目の数値が顕著に上がっている。「授業が楽しい」という項目が劇的に上がったクラスもある。その結果からも分かるように、「何のために今この活動をやっているのか」を授業者が示した授業では、生徒に意欲の向上が顕著に見られる。この変化は、研究授業を行った学校だけでなく、今年度の研究員の所属校全てにおいて当てはまる。つまり、校種・習熟度にかかわらずこの手法が有効であるといえる。

第三の成果は、学校としての指導方針の明確化と指導の質を保つことができるようになるということである。「Can-Do-List」を各学校で作成することにより、どんな授業者が教壇に立った場合も、同じ目標の授業を継続して行える体制が作れるようになる。

VII 今後の課題

「思考力・判断力・表現力」についての“Can-Do-List”が、担当クラスだけでなく同一科目や入学から卒業まで見据えたものに広がっていくと、今まで統一性がなかった評価規準が明確になり、目標到達に向けた計画的・継続的な指導が可能になると考えられる。

また、“Can-Do-List”は一過性のものではなく、生徒の実情に合っているか、彼らの力を伸ばすように設定されているかの検証を重ね、PDCA サイクル（計画・実行・評価・改善）に乗せていくことで、指導と評価の一体化を進めていくことが重要である。例えば、学習活動を終え、結果を評価した際に、低い評価しかできなかった項目については、その力を伸ばすための学習活動が必要になる。今回の研究では検証が十分ではなかったため、今後も継続的に検証を続けていくことが課題である。

さらに、「判断力」の評価において、私たちが言語を学ぶ上で、いつ「判断」を下しているのか、どの活動がこの力を測ることができるのか、などについてまだまだ議論の余地がある。判断力に関して「英語で発信された情報や考えについて、自己の知識や経験から状況を判断し、英語でその状況にふさわしい表現を選択する力」と定義したが、この力の評価法については、今後、更なる検証が必要と考える。

“Can-Do-List”の使用方法についても改善の余地がある。例えば、事前に生徒に目標として前ページにあるような“Can-Do-List”を提示した場合、そこに提示されていない事柄については、学習者の意欲を逆に失わせてしまうおそれがあるため、注意しなければならない。

今回、評価規準を「思考力・判断力・表現力」の3種類に分類して、それぞれの活動について検証を行ったが、最終的には生徒にこれらを統合して使える力を育成していくことが、私たちの使命であり、これからも、統合した学習活動に関する評価方法の検討と検証を続けていく必要がある。

<参考文献>

- ・金谷憲（2012年）『英語授業ハンドブック』 大修館
- ・米山朝二（2011年）『英語教育指導法辞典』 研究社
- ・大学英語教育学会（2011年）『テストと評価』 大修館
- ・菅正隆・中島洋一・田尻悟郎（2004年）『英語教育ゆかいな仲間たちからの贈りもの』 日本文教出版・三晃書房
- ・J.B. ヒートン（1992年）『コミュニカティブ・テスト』 研究社
- ・長沼君主・永末温子（2012年）『KASUMI CAN-DO GRADE Ver.6』
- ・根岸雅史（2012年）『CEFR-J 第1版』
- ・文部科学省 初等中等教育局国際教育課外国語教育推進室 外国語能力の向上に関する委員会（2011年）『国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策』
- ・東京都教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課（2012年）『適正で信頼される評価の推進に向けて』
- ・国立教育政策研究所 教育課程研究センター（2012年）『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（高等学校 外国語）』
- ・永末温子（2011年）『英語科における Can-Do リストおよび「学習－評価タスク」開発』

平成24年度 教育研究員名簿
高等学校・外国語

学 校 名	課 程	職 名	氏 名
広尾高等学校	全日制	教 諭	◎長田 裕之
浅草高等学校	全日制	主任教諭	田中 春子
三田高等学校	全日制	主任教諭	関口 美佐緒
町田総合高等学校	全日制	主任教諭	吉田 晴彦
永山高等学校	全日制	主任教諭	井 慎一郎
東村山高等学校	全日制	主任教諭	吉村 良太
瑞穂農芸高等学校	全日制	主任教諭	川 田 誠

◎ 世話人

[担当] 東京都教育庁指導部高等学校教育指導課 指導主事 瀬田 栄治
東京都教職員研修センター 研修部教育開発課 指導主事 市村 裕子

平成24年度
教育研究員研究報告書

高等学校・外国語

東京都教育委員会印刷物登録

平成24年度第243号

平成25年 3月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話番号 (03) 5320-6882
印刷会社 株式会社 イマイシ